
剣の英雄神

—日本神話におけるユーラシア神話モチーフ

松村一男

—Abstract

Archaeological excavations show the importance of iron swords: During the tumulus period, the power of the great king (later emperor) expanded. Myths and archaeological findings attest to the introduction of metallurgy from the continent and subsequent production of iron weapons which resulted in 1) the unification of the country by a great king, 2) the construction of huge tumuli by the ruling class to show their prestige, and 3) the worship of the iron sword and related myths about its power. Such worship of iron swords is told about the Scythians by Herodotus. In the Arthurian legends, the sword Excalibur is the source of the power and prestige of King Arthur. The worship of the iron sword as a divinity might have spread from the Scythians to both ends of the Eurasian continent, west to the Celts and east to the Japanese.

はじめに

日本神話は日本文化一般と同様に大陸からの影響を強く受けて形成されてきた。日本神話における剣の神の観念とその神話もその一つであり、ユーラシア大陸の諸地域の剣の英雄神観念の影響のもとに形成されてきたと思われる。以下では比較によってそれを示したい⁽¹⁾。

タケミカヅチとフツヌシ

『日本書紀』は、タケミカヅチとフツヌシはイザナキがカグツチの頭を剣で切り落とした時に生まれたと伝える。

一書六 腰にさげた十握剣を抜いてカグツチを斬って三つに断たれた。その各々が神となった。また剣の刃からしたたる血が、天の安河のほとりにある沢山の岩群となった。これはフツヌシの先祖である。また剣のつばからしたたる血が注いで神となった。名づけてミカハヤヒという。次にヒノハヤヒが生まれた。そのミカハヤヒはタケミカヅチの先祖である。

一書七 イザナキが剣を抜いてカグツチを斬って、三つに断たれた。その一つがイカヅチとなった。一つはオホヤマツミとなった。一つはタカオカミとなった。またカグツチを斬ったときに、その血が注いで、天の八十河原にある沢山の岩を染めた。それによって生まれた神を、名づけてイワサクという。次にネサク。子のイワツツオ。次にイワツツメ。子のフツヌシが生まれた。

『古事記』ではタケミカヅチは述べられているが、フツヌシは述べられていない。ただしタケミカヅチの別名のタケフツ、トヨフツはフツヌシと似通い、両神が一体化しているのかも知れない。またここでは八神がカグツチの血からではなく、剣から出現したとされている。こうした記述は、タケミカヅチが古来剣神とされてきたことを示すものであろう。

イザナキは腰にさげた長い剣を抜いて御子のカグツチの首を斬った。剣の先についた血が清らかな巖に走りついて出現した神はイワサク、次にネサク、次にイワツツノヲ。次に剣のもとの方についた血も巖に走りついて出現した神は、ミカハヤヒ、次にヒハヤヒ、次にタケミカヅチノヲ、またの名をタケフツ、またの名をトヨフツ。次に剣の柄に集まる血が手のまたからこぼれ出て出現した神の名はクラオカミ、次にクラミツハ。以上、イワサクからクラミツハまで合わせて八神は、御剣によって出現した神である。

『日本書紀』本文では、ニニギが葦原の中つ国に降臨する前に、フツヌシとタケミカヅチがオホクニヌシのもとに遣わされ、ニニギに対して国譲りをするようにとの命令を伝えている。その際に二神は剣と一体化した姿となっている。

タカミムスヒは諸神を集めて、葦原中国に遣わすものを選んだ。みなは「イワサクネサクの子で、イワツツノヲ・イワツツノメが生んだフツヌシがよいでしょう」と言った。そのとき天岩屋に住むイツノオハシリの子のミカハヤヒ、その子のヒノハヤヒ、その子のタケミカヅチが進んで言うのに、「どうしてフツヌシだけが丈夫で、自分は丈夫でないのだ」。その語気が大変激しかったので、フツヌシに添えて共に葦原中国に向かわされた。

二柱の神は出雲の国の五十田狭の小汀に降り、十握の剣を抜いて、逆さまに大地に突き立て、その先に膝を立てて座り、オオアナムチに尋ねた。「タカミムスヒが皇孫を降らせ、この地に君臨しようと思っておられる。そこで我々二人を平定に遣わされた。お前の心はどうか、お譲りするか、否か」。

『日本書紀』ではオオアナムチ(＝オホクニヌシ)とその子神たちは抵抗せずに国譲りをする。しかし『古事記』では、遣わされるのは天の鳥船とタケミカヅチである。二柱の神

は出雲の伊耶佐の小浜に降り立ち、「長い剣を抜いて波の上に逆さまに刺し立て、その剣の切っ先に胡坐をかいて」オオクニヌシに国譲りを迫っている。天の鳥船は名前からも他個所での性格付けからしても剣の神とは思われないので、国譲りを迫るのも、以下のタケミナカタとの力比べをするのもタケミカツチの方であろう。

二柱の使者による国譲りの要求に対して、オオクニヌシはまず子神の事代主に相談するが、事代主は献上するようにと返事をする姿を消してしまう。次いでもう一人の子神であるタケミナカタに相談するが、彼は好戦的で、大きな石を手に持ち上げながら現われる。この時に相手をした神は明示されていないが、上述のようにタケミカツチであろう。タケミナカタは「さあ、力比べをしよう、わしが先にその手を掴むぞ」という。そこで手を掴ませると「立っている氷のようであり、剣の刃のようであった」。そこでタケミナカタは恐れて退く。今度はタケミカツチがタケミナカタの手を取ると、「若い輩を掴むように掴み拉いで投げ打った」ので、逃げて信濃の諏訪に逃げ込み、そこに留まることを約束する。

垂仁紀では石上神宮と武器の記事に続く八十八年秋七月十日の個所において、天日槍について述べている。天日槍は「新羅の王子」で「小舟に乗って但馬国にやってきた」。「但馬に留まり、その女との間に但馬諸助を生んだ。これは清彦の祖父である」とある。さて垂仁天皇は群卿に詔して、天日槍が来たときに持ってきた神宝を自分の所有としたいと宣言し、天日槍の曾孫の清彦を詔して神宝を献上させようとする。しかし清彦はその中の出石という刀子だけは渡したくなくて、衣の中に隠しておいた。ところがそれが天皇に見られてしまい、差し出すことになる。この刀子は他の神宝と一緒に「神府」に納められた。後に神府を開けると刀子は消えていたので、天皇は清彦に尋ねると、「昨夕、刀子がひとりで私の家にやって来ましたが、今朝はもうありません」と答えた。その後、刀子はひとりで淡路島に行った。島の人はその神だと思い、刀子のために祠を立て、「今でも祀られている」。

なお文中の「神府」については、『釈日本紀』が垂仁天皇八十八年の同記載について、「石上神宮」のことであると説明している。

天日槍についてはさまざまな研究が行われているが（たとえば松前他1995）、天日槍の伝承は、韓半島からの渡来人技術者集団によって、鉄の冶金技術とともに剣の神についての伝承と崇拝が伝えられたことを示すものであろう。

記紀神話の神剣

・スサノヲのヤマタノヲロチ退治

『古事記』ではスサノヲがヤマタノヲロチを殺害し、死体を十拳剣で切ると、その尾から「都牟羽の大刀」を発見し、アマテラスに献上している。これは草薙の大刀であるとする

る。『日本書紀』本文でも同様にスサノヲは十握剣で尾を斬り、剣を発見する。これについては、「草薙の剣——書にいう、もとの名は天叢雲剣。大蛇のいるうえに常に雲があったので、かく名づけたが、ヤマトタケルに至って、名を草薙剣と改めたという——」という追記がある。さらに一書の二では、「これを草薙の剣と名づけた。これは今、尾張の国の吾湯市村にある。すなわち熱田神宮の祝部がお祀りしている神がこれである。その大蛇を斬った剣を名づけて、蛇の麓正という。これは今、石上にある」となっている。スサノヲが帯びていた剣が祀られているとされる石上については、次の一書の三に「今は吉備の神部のところにある」と記されているので、奈良の石上神宮ではなく、延喜式神名帳に見える備前国赤坂郡石上布都之魂神社ではないかという説もある（坂本他 126、頭注 2）。しかしいずれの石上神宮であれ、伝承における剣の神と石上との強い繋がりを示すことに変わりはない。

スサノヲがヲロチを斬る剣は、本文では「十握剣」、一書の二では「蛇の麓正」、そして一書の三では「蛇の韓鋤^{からきひ}の剣」と呼んでいる。鋤（鉏）は朝鮮語の *stapo* に由来し、日本語ではサヒ（小刀、刀）となった（坂本他 126、頭注 1）。ここでも鉄剣（とそれにまつわる伝承）が韓半島経由で伝わってきたことが示されている。

・神武東征

もう一つの神剣伝承が『古事記』神武天皇条に述べられている。これによれば、カムヤマトイハレビコ（神武）は東征の途上、熊野山中で大熊に出会い、彼も軍勢もにわかに病み疲れ伏し倒れた。この時、熊野の高倉下という者が「横刀」（太刀）を献じた。すると天皇は眠りから覚め、太刀を受け取った。そしてこの太刀によって熊野の山の悪神たちが切り倒され、軍勢も目を覚ました。この刀について神武が尋ねると、高倉下は彼が見た夢について語った。夢では、アマテラスと高木の神がタケミカヅチを召して、葦原中国で子孫の御子が困っているが、あそこはかつてあなたが平定した国なので、タケミカヅチに下るように求めるが、タケミカヅチは自身ではなく、その時に平定した太刀があるのでそれを降すと返答する。そして高倉下の倉の屋根に穴を開けてそこから落とし入れると述べる。そして高倉下に対して、朝になったら、その太刀を天孫に奉るように命じた、というのである。朝になり高倉下が倉を見ると夢の通りに太刀があったので、彼は神武に太刀を献上する。この太刀については、「名はサジフツ、またの名はミカフツ、またの名はフツノミタマと言う。今、石上神宮にある」と述べられている。

ここではタケミカヅチが国譲りの際に帯びていたないしは自身がそれであった霊剣と神武の東征を助けるために下された神剣とが同一であるとされており、さらにそれは石上神宮に納められているとされる。以下に見るように石上神宮には神宝の七支刀があり、神話と儀礼と剣自体が結びつけられている。

・ヤマトタケル

記紀では、ヤマトタケルは父の景行天皇から東征を命じられた際に叔母のヤマトヒメから草薙の剣を渡されている。これは「伊勢の大御神の宮に参りて」の折のこととされている。これは伊勢の斎宮の起源譚となっているが、霊剣である草薙の剣が伊勢の斎宮の所管であったとする伝承形を示す。東征中ヤマトタケルはこの剣によって焼け死ぬ危機を逃れるが、伊吹山の神を退治する際には油断して剣を携行せず、そのために重病に罹って亡くなってしまう。なお『日本書紀』は、ヤマトタケル没後の個所で、「草薙剣は、今尾張国年魚市郡の熱田神社にある」と記している。

石上神宮

奈良県天理市布留町の石上神宮は、延喜式神名帳に「石上坐布留御魂神社」と記載されている。祭神は神劍フツノミタマである。また国宝の七支刀が神宝として伝えられてきた。軍事を司る豪族の物部氏の氏社であり、朝廷の武器庫であつたらしい。垂仁紀には以下のようにある。

二十七年秋八月七日、神官に命じて、武器を神々にお供えすることの可否を占わせたら、吉とでた。そこで弓矢と太刀を、諸々の神社に奉納した。さらに神地・神戸を定めて、時を決めてお祭りさせた。兵器を以て神祇を祭るということは、この時に始まった。

また同紀の後の個所には石上神宮についてさらに詳しい記述がある。

三十九年冬十月、五十瓊敷命いにしきのみことは茅渟の菟砥の川上宮においてになり、剣一千口を造らせられた。よってその剣を川上部という。またの名を裸伴という。石上神宮に納めた。その後に五十瓊敷命に仰せられて、石上神宮の神宝を掌らせられた。一ある説によると、五十瓊敷皇子は茅渟の菟砥の河上においてになり、鍛冶の名は河上という者をお呼びになり、太刀一千口を造らせられた。この時に楯部、倭文部、神弓削部、神矢作部、大穴磯部、泊檀部、玉作部、神刑部、日置部、太刀佩部など合わせて十種の品部を、五十瓊敷皇子に賜った。その一千口の太刀を忍坂邑に納めた。その後、忍坂から移して石上神宮に納めた。この時に神が「春日臣の一族で、名は市河という者に治めさせよ」といわれた。よって市河に命じて治めさせた。これが今の物部首の先祖である。

また天武紀三（674）年八月三日の条には、「忍壁皇子を石上神宮に遣わして、膏油をもって神宝を磨かしむ。また勅して、元来は諸家の神府にあった宝物は、いまみなその子孫に

返せ」とある。上田正昭によれば（上田 162）、油によって磨かせたというのは、鉄製品が錆びないようにするためである。また後半部には元来は諸豪族のものであった宝物を持主に返せという命令があるが、そこには武器は含まれていないと考えるべきだとする。つまり石上神宮がより純粋に武器庫としての性格を帯びるようにしたという意味に解するのである。だからこそ、（鉄製の武具が錆びないように）油を塗れという前半の命令文が意味を持つというのだ。そして上田（同）はその傍証として、『日本後記』延暦二十四（805）年二月の条に石上の兵仗を平安京に運ぶのに延べ人数「十五万七千余人」が必要であったとされ、石上が他の社と異なる点として、「兵仗多く収む故なり」とされている点を挙げている（森田 2006：345－350）。

以上から、石上神宮は物部氏が管理していた朝廷の武器庫であり、多くの刀剣を保管していたと考えてよいと思われる。祭神が神劍ツツノミタマとされていたのももっともであるが、ツツノミタマはツツヌシであり、記紀では劍神としてのツツヌシの位置が次第にタケミカツチに侵犯される傾向が認められるが（三品 261）、名称はともかくとして古墳時代から記紀にかけて英雄神が劍の姿で崇拝されていたと考えてよいだろう。

七支刀の存在は明治七（1874）年、大宮司になった菅政友（1824－1897）によって初めて調査された。長さは 75cm ほど、主身の左右に三本ずつ刃が互い違いに出ている。刀としての実用性はなく、銚の形をしており、柄に装着のための目釘穴もない。象徴的宝剣である。来歴は早く失われたらしく、記録はない。しかし神聖視され、神職も忌み火をしなければ触れることは許されなかった。毎年六月に神田で田植え祭を行う際は、霊代と称して、馬に跨った神官がこれを打ち振りながら渡御の式を行ったという（宮崎 18－19）。

劍の表に 34 字、裏に 27 字、合わせて 61 字の銘文がある。表面の最初には劍の作成年度は「泰和」「泰始」の二説があり、それによって次の「四年」は 369 年か 468 年となる（宮崎 114、上田 171）。裏面にはこの劍が百済王世子によって倭王のために造られたとある。ここでも百済王が倭王に献上したのか、下賜したのか二説がある。しかし、ここでは韓半島で制作された祭事目的の霊劍が古墳時代の日本では朝廷の武器庫であった石上神宮に保管され、神聖視されていたという事実を確認しておくことでよいだろう。

古墳出土の鉄劍

1) 埼玉県行田市にあるさきたま古墳群は大小六十基で、六世紀頃の建造とされる。その中の一つの稲荷山古墳から 1969 年に出土した劍に銘文があることが 1978 年になって発見された。鉄劍は全長 73.5cm。銘文は金象嵌で表面に 57 字、裏面に 58 字、合わせて 115 字であった。表面ははじめに「辛亥年」とあり、471 年に刻まれたことが分かる。次に埋葬者であるヲワケ臣の家系が述べられ、裏面では彼が獲加多支鹵大王ワカタケルの磯城宮にも杖刀人の首として出仕したことが述べられている。このワカタケルは雄略天皇の幼名「大泊瀬 幼武」である。

2) 熊本県玉名市菊水町の江田船山古墳から出土した鉄刀銘文にも「治天下獲加多支鹵大王」と記されており、五世紀後半の雄略朝に東国と九州の豪族に対して銘文のある鉄剣、鉄刀が下賜されていたことが確認できる（宮崎、和田 138-143）。

こうしたことは記紀神話における霊剣伝承、剣神、そして石上神宮における七支刀をはじめとする霊剣の保管と霊剣視と併せ、古墳時代から鉄剣および剣の神への崇拝があったことをうかがわせる。そしてそうした鉄剣製造は渡来人の鍛冶師集団によるのだから、それに付随する神話や儀礼もまた外来であると仮定できるだろう。資料から見るなら、鉄剣崇拝のルーツとしては、イラン系遊牧民であるスキタイ人が以下のヘロドトスの伝承に見るように有力である。彼らを通して印欧語族的の三分構造が古墳時代の日本に伝播したと考えられることは、すでに大林太良、吉田敦彦らによって提唱されている（大林 1975、吉田 1974、大林+吉田）。

韓半島と中国

韓半島は日本よりも神剣・剣神の史料が少ない。三国時代の新羅の将軍・英雄の金庾信（595-673）について『三国史記』巻四十一が伝える以下の伝承が神剣の一例である（林沢 113）。

〔金庾信〕はひとりで宝剣を携えて、咽薄山の深い谷に入って、香を焚いて先に中嶽で祈ったように天に告げて、言葉を誓って祈祷すると、天から急に靈光が垂れて宝剣に降りた。三日目の夜には虚星と角星の二つの星の光芒が赫然として垂れてきて、宝剣が自ら動くようであった。（中略）馬に跨り剣を抜いて飛び出して敵陣に入り、敵将の首を斬って帰って来た。

中国では弓矢の名人の羿による射日神話が有名だが、剣についてその聖性を伝える伝承は見当たらない。四世紀半ば頃の干宝による志怪小説集『搜神記』巻十九には「大蛇を退治した娘」というスサノヲのヲロチ退治と類似の話があるが、大蛇を殺すのは犠牲となるはずの娘であるし、殺害に用いられた剣は名前を持たず、名剣ともされておらず、殺された竜から別の名剣が発見されることもない（竹田訳 365-367）。竜殺し神話に属するが剣の神聖視の要素は見当たらない。

しかし上記のスサノヲ神話の「蛇の韓鋤の剣」の個所でも述べたように、剣の神の伝承は韓半島経由で伝来したはずだから、韓半島にも存在した可能性は高いと思われる。しかし上記の例からすれば、中国に由来するとは考えにくい。だとすれば、韓半島に剣の神の観念を伝えた候補としては、やはりスキタイ文化が中国を経由せずに韓半島に到達した可能性を考えるべきだろう。

スキタイの剣神

ヘロドトス『歴史』(4.59, 62) はスキタイ人の剣崇拜を伝えている(松平訳 37-39、語句を一部変更し、カッコで補足説明して引用)。

59. スキタイ人が祀る神は以下のものだけである。最も重んずるのはヘスティアで、ついではゼウスとゲーで、彼らはゲーをゼウスの妻としている。さらにアポロン、ウラニア・アプロディテ、ヘラクレス、アレスがある。これらの神々はスキタイの全部族が祀るが、王族スキタイ人はさらにポセイドンにも犠牲を備える。スキタイ語では、ヘスティアはタビティ (Tabiti)、ゼウスは私の考えるところではきわめて妥当な名称のパパイオス (Papaïos)、ゲーはアピ (Apia)、アポロンはゴイトシュロス (Gotosyros)、ウラニア・アプロディテはアルギンパサ (Argimpasa)、ポセイドンはタギマサダス (Thagimasadas) という。神像や祭壇や社は造らぬ慣わしだが、アレスだけは別で、アレスのためにはこれらを設けるのが慣習である。

62. アレスに対する犠牲の儀式は次のように行われる。スキタイの諸王国内の各地区にはそれぞれ次のようなアレスの聖所が設けられている。薪の束が縦横おのおの三スタディオン、高さはそれに及ばないが、それだけの量に積み上げられている。その上に四角の台が設けてあり、三方は切り立っていて一方だけが登れるようになっている。彼らは毎年車百五十台分の薪を積み加える。悪天候のために堆積が絶えず沈下するからである。どの地区でもこの堆積の上に古い鉄製の短剣がのせてあるが、これがアレスの神体である。スキタイ人はこの短剣に毎年家畜や馬を犠牲に捧げる。他の神々にも供えるもののほかに、アレスにはさらに次のような犠牲も捧げる。戦争で生け捕りにした敵の捕虜のうちから百人に一人の割で犠牲にするのだが、その犠牲式の次第は家畜の場合と異なっている。まず犠牲に供される人間の頭に酒をふりかけてから、その者の咽喉を切り裂いて血を器に受け、その器を薪の山の上に持って行って、その血を短剣にかける。血を上を持っていく一方、下方の聖所のまわりでは次のような儀礼が行われる。屠られた男たちの右肩をことごとく腕ごと切り離して空中に抛り上げ、その他の犠牲の行事を済ませてから立ち去って行く。後には腕は落下したところに、胴体は別の場所にそれぞれ横たわっている。

アーサー王伝説と聖剣

アーサー王、円卓の騎士、湖の騎士ランスロット、聖剣エクスカリバーなどについての物語のもっとも一般的な形は十五世紀の半ばにトーマス・マロリーが著した『アーサー王の死』(Syr Thomas Maleore Knyght, *Le Morte Darthur*) であるので、まずここで比較の対象となる主

要なエピソードを紹介しておく（厨川訳）。

・**アーサーの誕生**：五世紀、イギリス南西部のコーンウォール地方を治めていたゴルロイス（ティンタジェル公）という王がいた。その妃、イグレーヌは美しく聡明で有名だった。敵対国の王ウーゼルはこの妃に恋をして彼女を奪うべくコーンウォールに攻め入り、魔法使いマーリンの力を借りてゴルロイスに姿を変え、妃と床を共にした。一方、本物のゴルロイスは時を同じくして戦死してしまう。ウーゼルはイグレーヌと結婚し、事前の約束どおり生まれた子供をマーリンに預ける。その子供がアーサーである。

・**アーサーの即位**：マーリンはアーサーをエクター卿に預ける。アーサーは卿の息子のケイと一緒に育てられる。アーサーが十五歳になった頃、カンタベリー大寺院の前に不思議な石が現れた。石の上には鉄床があり、一本の剣が刺さっていた。剣には「この剣を抜く者は全イングランドの正当な王としてこの世に生まれし者なり」と記されていた。何人もの人が試みたが誰も抜くことは出来なかった。ある日、馬上槍試合で近くに来ていたケイが剣を忘れてきたので、一緒にいたアーサーが剣を取りに戻ったが、教会の前の石に刺さっている剣を見つけ、抜いてケイに持っていった。ケイは父親のエクターに自分が抜いたと言うが嘘はすぐに見破られ、アーサーが抜いたことが判明する。そしてアーサーはイングランド王として即位する。

・**アーサー王の戦いとエクスカリバー**：アーサーは戴冠式を終え王となるが、若輩の彼を周辺の王たちは王と認めず戦いが勃発する。戦闘の最中にアーサーは自分の剣を失う。そこでマーリンがアーサーを湖に連れて行き、湖の真中に一本の乙女の手が捧げ持つ剣を見せる。この剣こそエクスカリバーであった。アーサーはこの剣を手に入れる。これによってアーサーは戦争に勝利する。遠征から戻ると、アーサーはオークニーのロット王の妃のモルゴースと不倫する。こうしてアーサーは知らずに実姉のモルゴースとの間に子供を儲ける。その子が後にアーサーの王国を滅ぼすモードレッドである。

（中略）

・**最後の戦い**：アーサーはフランスに兵を進める。その間に、王の留守を預かるモードレッドが反逆の狼煙を上げる。アーサーは急いでキャメロットに戻り、モードレッドと激しい戦いを繰り広げる。これ以上戦えば両軍ともに全滅してしまうという時、和睦を結ぶことが決まる。ところが一匹のヘビが騎士の一人に近づいたので、騎士は剣を抜いてそのヘビを殺す。そして剣が抜かれたことで、再び戦いが始まってしまう。最後にアーサーはモードレッドを殺すが、同時に自らも瀕死の重傷を負う。

・**アーサー王の死**：死期が近いことを知ったアーサーは、生き残っていたベディヴィアにエクスカリバーを湖に投げ込むことを命じる。ベディヴィアは二度躊躇するが、三度目に投げ込むと湖から手が出て剣を受け止め、水中に消えた。ベディバアが戻ってくると海には一艘の小船が浮かんでおり、周りには喪服を着た婦人たちがいた。アーサーは小船に横たわると「これからアヴァロン島へ行き傷を治す」と言って、小船は岸を離れ婦人たち

と共に霧の中へ消えた。アーサーの墓碑には「ここに過去の王にして未来の王アーサーは眠る」Hic jacet Arturus, rex quondam, rexque futurus と書かれていたという。

マロリー『アーサー王の死』は、作品の末尾に1469-70年に書かれたとなっている。そしてこれを印刷業者のウィリアム・キャクストンが1485年に印刷した。後にヴィナーヴァ(Eugène Vinaver)は、この書が八篇の十三世紀フランス語の散文物語から纏められたと指摘した(厨川訳:462-464)。

ジェフリー・オヴ・モンマス『ブリタニア列王史』のアルトゥールス

以上から分かるようにアーサー王伝説は十三世紀のフランスに遡りうるが、更にその先も遡る資料もある。それは、イングランドの聖職者・歴史家のジェフリー・オヴ・モンマス(Geoffrey of Monmouth, 1100頃-1154/5頃)がラテン語で書いた『ブリタニア列王史』(*Historia Regum Britanniae*, 1138頃)である。

ウーテル・ペンドラゴン(「竜の頭」)は兄のブリタニア島王アウレリウス・アンブロシウスの死去に伴い王に即位する(132-135章)。ウーテルは部下のゴルヌビア公ゴルロイスの夫人インゲルナを一目見るとたちまち彼女の虜となり、予言者メルリヌス(マーリン)の魔法によって彼女の夫の姿となり、思いを遂げる。その間にゴルロイスは戦さで命を落とす。ゴルロイスの死後、ウーテルはインゲルナと結婚し、息子アルトゥールスが生まれる(137-138章)。ウーテル王が病のために亡くなると、アルトゥールスはブリタニアの諸侯の支持を得て15歳で戴冠してブリトン人たちの王となる(142-143章)。コングリヌスを指揮官とするサクソン人がブリトン人の絶滅を図って攻撃してきたので、アルトゥールスは名剣カリブルヌスとロンという槍を手にブリトン人を率いてサクソン人と戦う。そして名剣によって多くの敵を倒し勝利を得る(143-147章)。

アルトゥールス／アーサーの誕生については、ジェフリーとマロリーに大きな違いはない。違うのは剣を引き抜いて王になったという部分がジェフリーにはない事である。ただサクソン人との戦いにおいてアルトゥールスは名剣カリブルヌスを手に勝利を得ている。これがマロリーのエクスカリバーと同じことは明らかだ。同書を邦訳した瀬谷によれば(ジェフリー 2007: 280 n.19)、「アーサー王の有名な剣は初めてジェフリーの本書の中に出てきて、“カリブルヌス”(Caliburnus)と呼ばれ、アヴァロンの島で鑄造されたことになっている。この名はラテン語の“カリブ”(chalybs)「鋼鉄」に由来する。したがって“エクスカリバー”とは「鋼鉄から造られた(剣)」ということになるだろう。」しかしこの剣の由来はジェフリーには述べられていない。

その後、アルトゥールスはガリアを含むヨーロッパ各地で戦いを行うが、最大の敵はローマであった。そしてそのローマに対してもアルトゥールスの軍勢は勝利を収める（154-175章）。しかしその間にブリタニアの統治を委託していた甥のモードレドゥスが謀反を起こし王位を篡奪したという知らせが届く（176章）。アルトゥールスはブリタニアに取って返し、モードレドゥスの軍勢と戦う。モードレドゥスは戦死するが、「アルトゥールスもまた瀕死の重傷を負い、そこから彼の傷を治すためアヴァロンの島へ運ばれた」（177-178章）。

ここでは剣が湖に投げ込まれることやアルトゥールス／アーサーが女たちの船に載せられる場面はない。つまりジェフリーの伝えるアーサー王の名剣にまつわる伝承は、名前以外はジェフリーより後の時代に追加された可能性が高い。ではそうした剣による王の選出や湖から与えられ、王の死後に返還される剣というモチーフは一体どこの誰によって加えられたのであろう。

上述のリルトンはマルカーとともに、こうしたアーサー王の剣エクスカリバーに関する由来不明の伝承要素がコーカサスのイラン系オセット人の伝えるナルト叙事詩における剣の英雄バトラズの伝承と一致すると指摘し、両者には歴史的な関係があると論じている（リルトン+マルカー）。この点は以下に詳述する。その前にバトラズの剣についての伝承を紹介しておく。

オセットのナルト叙事詩における剣の英雄バトラズ

デュメジルはバトラズの死についての伝承を以下のように記している（Dumézil 69: 19. Comment mourut Batraz）：

バトラズがあまりに多くのナルトたちを殺害したので、神は怒った。しかしバトラズは不死身で、神が差し向けた天使や聖人さえも打ち負かした。そこで神はあらゆる種類の不治の病を彼に下し、死という皆に等しい運命に従わせることにした。しかしそれはナルトたちにまで及んだ。なぜならバトラズの癒えぬ傷は悪臭を放ち、それは人々も殺すものだったからだ。そこでわずかに生き残ったナルトたちはバトラズに対してどうか彼らを根絶やしにしないでくれと頼んだ。バトラズも彼らを哀れに思い、もう十分に復讐はしたから自ら命を絶つと宣言した。「だが私は剣が海に投げ込まれないかぎり、死ぬことはないのだ。そういう定めになっている」と彼は語った。ナルトたちは新たな困惑に陥った。どのようにしたらバトラズの剣を海に投げ込めるのだ？ 彼らは、剣は海に投げ込まれたから、彼の死ぬ時が来たと告げて英雄を欺こうと決めた。そして悲しみを装って彼に近づくと、運命の条件は満たされたと宣言した。「私の

剣が投げ込まれた時、どんな奇跡を見たのか？」とバトラズは問うた。ナルトたちは困惑しながら、「何も」と答えた。「それは私の剣が海に投げ込まれていないからだ。本当なら奇跡を見たはずなのだから」。ナルトたちは諦めざるを得なかった。彼らは全力を尽くして何千頭もの家畜に剣を牽かせた。やっとのことでバトラズの剣を海岸まで持ってきて海に投げ込んだ。たちまち波と暴風が巻き起こり、海は沸き立ち、血の色に染まった。ナルトたちは驚きまた大いに喜んだ。彼らは急いでバトラズのもとに行き、何を見たかを語った。バトラズは答えに満足すると息を引き取った。ナルトたちはたやすく彼を埋葬できた。しかし葬儀をしたにもかかわらず、彼らはバトラズが普通の人間とはどうしても信じられなかった。神はこの不信心に怒って、天から火の雨を降らせた。このためナルトたちは皆死んだ。

このようにスキタイ人の後裔のオセット人の英雄バトラズの最後場面における剣の描写とアーサー王伝承におけるエクスカリバーの描写は酷似している。その理由としてリトルトンとマルカーは、以下のスキタイ系イアジュゲス族がブリテン島に送られた歴史的事実を考えている。彼らがスキタイの剣の神の伝承を持ち込んで、それがブリテン島でエクスカリバーの伝承に姿を変えたというのである（リトルトン+マルカー）。

歴史的背景としてのサルマティア人

オセット人は広義のスキタイ人に属するサルマティア人（サウロマタイ、サロマタイ）の子孫である。サルマティア人についてはヘロドトスが話を伝えている（4.110-116）。

ディオ・カッシウス（後2-3C.）の『ローマ史』には、ローマとマルコマンニ族との戦争（後166-172、177-180年）では、169年にサルマティア（サウロマタイ）人の一部族であるイアジュゲス族（Jazyges）がドナウ川を越えてパンノニア平原（現ハンガリー）に侵入したが、ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの軍との戦いに大敗し、175年に降伏したと述べられている。その際、彼らは賠償として重装備の騎馬兵を差し出したという（Sulimirski 174-176）。『ローマ史』は次のように述べる（72.16）。

16. イアジュゲス族は戦いに敗れ和睦を結んだ。〔リーダーの〕ザンティクス Zanticus 自身がアントニウス〔マルクス・アウレリウス帝〕の前に嘆願者として現れた。（中略）盟友となった徴として彼らは八千人の騎兵カタフラクティ（cataphractii「鎖帷子の鎧を着けた者たち」）を提供し、そのうちの五千五百人はブリテン島に送られた。

ブリテン島北部ではカンブリア人やピクト人がローマ軍の支配地域を脅かしており、そのためにハドリアヌス帝時代には城壁が作られたが、それでも侵入は止まなかったため、スキタイ系でブリテン島では異民族であるサルマティア人ならば、大規模な民族反乱の心

配もないし、比較的平坦なブリテン島では騎兵師団の効果が大きいと考えられ、北方の異民族に対する防衛のために投入されたと思われる。彼らがブリテン島にいたこと、そして故郷には戻らなかったことは以下のように碑文資料から分かっている。

ローマ帝国のラテン語碑文は十九世紀にドイツの古代史家テオドル・モムゼンが『ラテン碑文集成』(*Corpus Inscriptiones Latinae, CIL*)としてまとめている。CIL 7.218 はアポロン・マボヌス (Apollon Maponus) に皇帝の健勝を祈願する石碑で、後 238—244 年に「ブレメテンナクム・ゴルディアヌス〔在住〕のサルマティア人騎兵軍団」(numerus equitum Sarmatarum Bremetennacensium Gordianus) が寄贈したとなっている。ブレメテンナクムはブリテン島におけるローマの城塞の一つで、現在のマンチェスターの北、ヨークの東でアイリッシュ海にほど近い。現在の地名はリブチェスター (Ribchester) である。北のハドリアヌスの城壁に通じる街道にあった (Richmond 15-18)。

上記ディオ・カッシウスによればイアジュゲス族がブリテン島に送られたのは 175 年で、碑文の年号は 238—244 年だから、この時には送られた騎兵団はすでに引退していたはずである。しかし彼らは祖国には戻らずにブリテン島に定住したのだろう。碑文で彼らの存在が確認できるのはこの場所だけだが、通常、城塞の兵士は五〇〇人程度だったので、サルマティア人が防備に就いていた城塞は他にもあったと考えられる。軍務期間を終えて退役すると、彼らは現在のランカシャー州南西部リブチェスター村 (Ribchester) 近辺にあったローマの騎兵隊駐屯地ブレメテンナクム・ウェテラノールム (Bremetennacum veteranorum) に定住した。彼らの最初の指揮官は、第六ウィクトリクス軍団の総督であったルキウス・アルトリウス・カストゥスというローマ軍将校だった。彼の軍団はヨーク (エボラクム) に本部を置き、北ブリテンの防衛の任にあたっていた (Richmond)。

歴史的背景としてのアラン人

サルマティア人と並んで狭義のスキタイ人であるアラン人について、ローマの歴史家アンミアヌス・マルケリヌス (Ammianus Marcellinus) はヘロドトスのスキタイ人の剣の神アレス崇拝の記述と極めて類似した風習を伝えている (31.2.23)。

この国には神殿や聖所はない。藁で屋根を葺いた小屋さえ見当たらない。その代わりに野蛮人の風習に従って、剥き身の剣が地面に突き立てられ、彼らが居住する土地を支配する戦闘の神として熱心に崇拝されている (Nec templum apud eos visitor aut delubrum, ne tugurium quidem culmo tectum cerni usquam potest, sed gladius barbarico ritu humi figitur nudus, eumque ut Martem, regionum quas circumcolunt praesulem, verecundius colunt.)

アーサー王の剣エクスカリバーが持主の最期の時に水に投げ込まれるという伝承は、上述のようにオセット伝承と類似しており、アラン人やサルマティア人を含む広義のスキタ

イ人に由来する可能性があるが、アーサーが王として認知されるきっかけとなった石に刺さった剣を抜くという伝承についても、スキタイの剣のアレスやアラン人の剣の崇拝とつながっていると考えられるかも知れない。アラン人がフランスにいたことは碑文の分析から分かっている (Thompson)。

アーサーとアルトリウス

アーサー王の名前については、それがローマの軍人に由来するのではないか、そしてその軍人はブリテン島においてアーサー王伝承を生み出すような活躍をしたのではないか、というアメリカの言語学者マローンによる論考がある。彼はアーサーという名前がケルト語では大変に珍しいもので、ラテン語名アルトリウス Artorius のケルト形とする (言語学的説明は Malone 368、マイヤー 8 もこの説に賛成している)。Artorius はラテン語では珍しい名前だが、碑文によってその名前の人物がブリテン島にいたことが分かっている。『ラテン碑文集』CIL の III, 303 (no.1919) と III, 2131 (no.12791) は、ダルマティア地方 (現在のクロアチア) のスプリットに近いポドストラナ (Podstrana) で発見されている。前者のより長い碑文はアルトリウス自身が生前に彫らせたもので、彼はこの地で亡くなったと思われる (碑文原文とその解釈についてはマローンが詳しく述べているので興味のある方は参照されたい)。そのなかで本稿にとって重要な部分のみを記せば、以下のようになる。

上述のルキウス・アルトリウス・カストゥスは騎士階級のローマ市民であり、ダルマティアのポドストラナで生涯を終えたことから考えて、この地方の出身であった可能性が高い。彼は軍人としてさまざまな軍団に属してローマ帝国内を転戦したが、最後にはブリテン島のヨーク駐屯地において第六軍団ウィクトリックス (VI. Victrix) の総督 (praefectus) となった。在職中にアルモニカ (現在のブルターニュ半島) で反乱があったので將軍 (dux) として赴いた。この際かどうか不明だが、彼は負傷して引退した。その際、功績を称えられた他、北ダルマティアのリブルニア (Liburnia) 州の財務官 (procurator centenarius) という重要な職を与えられている。

マローンはこのアルトリウスがアーサー王のモデルとなったと考えられる理由を挙げている。①名前が対応する、②いずれもブリテン島を敵の侵略から守るために戦う、③いずれもブリテン島の軍勢を率いてフランス (アルモニカ、ガリア) に戦いに出ている、④負傷して姿を消している (Malone 373)。

ゲルマン (北歐)

ゲルマン (北歐) では『ヴォルスンガサガ』に以下のような聖剣の伝承が見られる。ヴォルスング王には十二人の子供があり、長男シグムンドと長女シグニューは双子であった。そのシグニューにガウトランド [ゴード人の国] 王シゲイルが求婚し、婚姻の盛大な祝宴が

催されていたが、その席に一人の男が現われる（第3章、谷口1979：537）。

汚れたマントを着て、裸足で、足にはリンネルのズボンを履いていた。手には剣をもって、バルンストック〔ヴォルスング王の館の中央にある「子供の樹」という生きた樫の大樹〕の所に行った。頭には帽子を被っていた。ひどい白髪で、年寄りで片目だった。彼は剣を振り上げると、幹に突き刺した。剣は柄までめり込んだ。誰一人としてこの男に挨拶を口にする者の出来る者はいなかった。すると男は口を開いて言った。「この幹からこの剣を引き抜ける者にこれをわしからの贈り物として差し上げよう。その者はこれに勝る剣を手にはすることは決してないということを自分で知るだろう」こう言ってから老人は広間を出て行ったが、この老人が誰で、どこに行ったのかは誰も知らない。さて、彼らは立ち上がって、剣を取るのを他人に任せる者はいなかった。一番先に引き抜いた者が一番勝れた者だと思った。そこで一番の名士が先ず進み、他の者が一人一人それに続いた。だが、そこに行った者で引き抜ける者はいなかった。というのは、彼らが手をかけてもびくともしなかったからだ。さて、ヴォルスング王の子シグムンドが行って、剣に手をかけ、苦もなく幹から引き抜いた。その武器は誰もそれに匹敵するほど見事な剣は見たことがないと思うほどの業物と思われた。

唯一相応しい勇者・英雄のみが突き刺さった霊剣を引き抜くことが出来るというモチーフはアーサー王の場合と同じである。

さてシゲイルはシグムンドに対して、黄金でこの霊剣を贖おうとするが、もちろん拒否される。しかしシゲイルはこの事を深く恨み、ヴォルスング王とその子供たちを返礼の祝宴に招くが、これは彼らを皆殺しにする謀略であった。そしてこれによってヴォルスング王をはじめとする一族は皆殺しにされ、シグムンド一人が生き残った（4-5章）。シグニューは魔法によって姿を変えて、隠れているシグムンドと交わり、シンフィヨトリという息子が生まれた（7章）。シグムンドとシンフィヨトリはシゲイル王を殺し、復讐を遂げる。シグニューはシンフィヨトリがシグムンドの子であることを明かした後、シゲイル王と共に燃える館で死ぬ。その後シグムンドは父ヴォルスングの領地を取り戻して王となり、ボルグヒルドという妻を娶る（8章）。シンフィヨトリはヴァイキングに出かけて、たまたまボルグヒルドの兄弟たちと争いになり彼らを殺してしまう。ボルグヒルドはこのことを恨み、シンフィヨトリに毒を飲ませて殺害してしまう。シグムンドがシンフィヨトリの亡骸を抱いて森の中にフィヨルドに來ると一人の男が小舟に乗っており、シンフィヨトリの亡骸を受け取ると姿を消してしまう。王はボルグヒルドを追放する（10章）。

シグムンドは新たな后としてヒョルディースを迎えるが、彼女を巡っての争いからリョングヴィ王と戦いとなる（11章）。その最中に、

目深に帽子を被り、灰色のマントを着た男が戦場にやって来た。男は片眼で手に槍

を持っていた。この男はシグムンド王の方に向かってやって来ると槍を王の前に構えた。シグムンドがはっしと切りつけると剣は槍に当たって二つに折れた（谷口 1979 : 549）。

これを境にシグムンド王の軍勢は劣勢となる。妻のヒョルディースは戦いの後、戦場に行ってシグムンドが横たわっているのを発見して、傷は治らないものかと尋ねた（12章）。

彼は答えた。「(中略) わしは幸運に見放されたのだ。治してもらいたくはない。オーディンがわしに剣を振るわぬよう望んでおられるだ (中略)」王は言った。「(中略) 折れた剣は大事にとっておくがよい。これからグラムと言われる名剣が作られるだろう。わしらの息子がそれを運び、それで決して忘れられることのない偉業を成し遂げ、彼の名はこの世の続く限り残るだろう」(谷口 1979 : 551)

ヒョルディースはデンマークの王子アールヴに見初められてその妻となるが、彼女はシグムンドとの子を生む。この子はシグルズと名づけられる。彼は養父レギンのもとで育つ（13章）。レギンは彼に自分の兄弟で竜の姿で黄金を護っているファーフニルを殺すように求める。シグルズは交換条件としてレギンに名剣を作るように求め、母のヒョルディースからシグムンドの折れた剣を貰い受けて、それを使ってレギンに新しい剣を作ってもらう（15章）。この剣はグラムともリジルとも呼ばれている（19章）。シグルズはこの剣でレギンを殺し、竜の姿のファーフニルの財宝を発見するが、その中には剣フロッティもあった（20章）。

ケルトのアーサー王伝承では最初の石に突き刺さっていた剣と湖から与えられるエクスカリバーは別物である。ゲルマンにおいてはオーディンがバルンストックに突き刺す剣はグラムだが、これは後にシグムンドがオーディンと戦った際に一度二つに折れ、レギンによって再度新たな剣として作られている。名前はグラムの他にリジルとも呼ばれている。こうした霊剣の二重性も独立に成立したものではないだろう。北欧の神話や伝承は記録されるのは大体十三世紀だが、もちろんそれは伝承自体の時代ではない。ただし、文字文化はキリスト教化の早かったケルト文化圏で五世紀には成立している。また、ノルウェーやアイスランドのノルド人がヴァイキングとしてブリテン島やアイルランドに来ていたことは事実だし、なかでもマン島は両者の交易の場として有名だった（Byock 1984）。交易を機にケルトのアーサー王の剣のモチーフが北欧のゲルマン人に伝わったと考えるのが妥当だろう。事実、大陸ゲルマンの『ニーベルンゲンの歌』はジークフリート（北欧のシグルズ）から話が始まっており、シグルズの父シグムンドは登場しないし、その剣のエピソードも語られていない。

フン族

フン族の王アッティラが剣によって自己の王の地位を主張したという伝承が歴史家ヨルダネス（550年頃）の『ゴート史』 *De origine actibus que Getarum* (35.183) に見られる。

彼はつねに自信満々な性格だったが、それを彼に一層確信させたのはスキタイ人の諸王のもとでつねに神聖視されていたマルスの剣を発見したことだった。歴史家プリスクス Priscus によると、この剣は次のようにして発見されたという。「羊飼いが群れの牝牛の一頭がびっこを引いているのに気づいたが、傷の原因が分からなかった。彼は血の跡を辿って行ってとうとう牝牛が最後に草を食んでいてたまたま踏みつけた剣を見つけた。彼はそれを掘り出してただちにアッティラのもとに持っていった。彼はこの贈物に喜んで、野心に満ちていたので、彼が世界全体の支配者に任じられたのだ、そしてマルスの剣があらゆる戦さでの勝利を保証したと信じた。se mundi totius principem constitutum et per Martis gladium potestatem sibi concessam esse bellorum」

ヨルダネスはこの前の部分でアッティラがフン族の王となったのは445年と記している。プリスクスは東ローマ帝国の政治家・歴史家で、449年に東ローマとアッティラとの間で行われた和平交渉に出席していたという。彼は『ビザンツ帝国史』を著したとされているが現存しない。上記のヨルダネスによるプリスクスの引用は同書によるものであろう。ここではアッティラが地中から入手したとされる霊剣はスキタイ人が崇拝していた剣の姿の神アレス（ローマのマルス）であるとされている点が注目される。フン族が匈奴と同じなのか、アルタイ系なのか、チュルク系のかなど決着はついていないようだが（江上1948b、沢田、エッシャー+レベディンスキー）。しかしともかくスキタイのようなイラン系ではない。

スキタイの剣の戦神アレスの崇拝がフン族にも知られていたこと、そしてアッティラがそれを知っていて自己の王位の正統性の主張に利用したと伝承では言われていることが上記の引用から確認できる。アッティラが存在が大陸と北欧のゲルマン人にも大きな印象を与えていたことは、それぞれの伝承が示している。大陸ゲルマンの『ニーベルンゲンの歌』の二十章にはクリムヒルドの二番目の夫エッツェル Etzel として登場しているし、北欧のエッダではアトリ Atli として多くの詩篇に数多く登場している（「シグルズの歌断片」、「グズルーンの歌Ⅰ」、「シグルズの短い歌」、「ニヴルング族の殺戮」、「グズルーンの歌Ⅱ」、「グズルーンの歌Ⅲ」、「オッドルーンの嘆き」、「グリーンランドのアトリの歌」、「グリーンランドのアトリの詩」、「フン戦争の歌、またはフズの歌」。谷口訳1973参照）。もちろんこれらに描かれているのは現実のアッティラではない、彼とフン族の与えた強烈な印象がゲルマン人の中で英雄叙事詩の敵役の異国の暴君となったのだ。

リトルトンとマルカーによれば、アーサーが石に刺さった剣を抜いて王になるモチーフ

がイラン系アラン人の影響によるものであると考えるならば、ケルトのアーサーの剣モチーフと類似する北欧のシグムンドの剣のモチーフもケルトに由来することになる。東ローマ帝国の歴史家の伝えるフン族の王アッティラと剣の伝承がゲルマンのシグムンドの剣伝承に影響を与えたと考えるのは難しい。ゲルマン伝承におけるアッティラのイメージは完全な悪役・敵役であり、その彼の伝承から聖剣の観念をゲルマン人が受容したとは考え難い。

ベトナム

十五世紀のはじめ、ベトナムの黎王朝の太祖であったレ・ロイについては、ハノイのホー・ホアン・キエン（還剣湖）の伝説がある（宇野 360—361）。それによると、王は湖から剣を得て、それを揮って明の軍を撃退して王位に就いたが、即位式はその剣を得た湖の上で執り行われた。すると湖の底から一匹の巨大なカメが出現し、レ・ロイの神剣は彼の手を抜け出してカメの方に飛んでいき、カメは剣をくわえて湖の水中に戻ってしまったというものである。また別伝によれば、レ・ロイは王位に就くと神への感謝の祭を催したが、湖岸で儀式が始まると神剣は自ら鞘から抜け出して竜となり、水中に沈んで二度と姿を現さなかったという。神剣は池の神であり、神に敬意を表して、池の中には搭が立てられたという。

この伝説を日本で最初に紹介したのは（おそらく）大林太良で、1973年に北ベトナムを訪れた際に気づいたと述べている。そして、「アーサー王の愛剣エクスカリバーに相通ずる伝説である」、「ユーラシアの剣神・剣の英雄複合の余波は琉球やベトナムにも及んでいたものと思われる」と指摘している（大林+吉田：252—253）。この伝承についてはその後大林の弟子の宇野が詳しく検討しているが、「還剣湖周辺は一九世紀末にフランス人が城下町の東南の外れに新しく作った地区なのであって、一九世紀の初めまでは城の側からまっすぐに近づく道もない寂しい場所であった（中略）黎利（レ・ロイ）が還剣湖で神剣を入手したとか、即位のときに還剣したという現行の伝説の筋立ては、一九世紀後半までしか文献上さかのぼらない」（宇野 361）と述べられているように、古くからのものではなく、フランス人によって持ち込まれたアーサー王とエクスカリバーの伝承に影響されて出来た可能性が高いと思われる。

まとめ

日本の記紀に見られる神剣神話には草薙の剣、フツヌシ、タケミカヅチなどがあり、実物の剣としては石上神宮の七支刀、稲荷山古墳と江田船山古墳のワカタケルの名の刻まれた鉄剣があり、そうした神剣神話や実物の鉄剣の背後にはユーラシア大陸からの剣の英雄神話と鉄剣加工技術の伝来が想定される。確認出来るその源泉のひとつはヘロドトスが伝

えるスキタイ人のもとでの鉄剣としての戦神アレスの崇拝である。これは同じ遊牧系スキタイ人のサロマタイ人やアラン人によってヨーロッパに伝えられ、アーサー王とエクスカリバーの伝承を生み出す要因となったと思われる。またアラン人の後裔であるコーカサスのオセット人のもとでも、アレス崇拝がナルト叙事詩の英雄バトラズの姿に残っている。ゲルマンのエッダやサガの剣伝承、とくにシグムンドとアーサー王の剣による選択の件の類似は、ケルト伝承のゲルマンによる採用と考えられる。なおベトナムのレ・ロイ王の神剣伝承は新しい時代のもものらしいが、それでも神剣伝承が依然としてユーラシアの東西を伝播する力を有することを示している。

このように、日本からウェールズまでのユーラシア大陸の東西に残る剣神＝神剣の伝承は相互に無関係なものではなく、人々の移動と交流の歴史から生み出された共有財産と考えられる。馬具の完成によってユーラシアのステップ地帯においては多数の家畜を飼育する遊牧民の生活様式が形成されるようになった。そして今度は鉄の鑄造技術の進歩によって鉄製の武器が広まり、遊牧民はそれを持つようになり、東西に移動しつつ穀倉地帯を侵略しはじめる。そこには共存による定着も戦闘による支配や撤退もあり得たであろう。また遊牧民も単一ではなかった。広義のスキタイも狭義のスキタイ、サルマティア、アランなどに分かれて争っていたし、モンゴル、チュルク、ゲルマンなど異なる民族的背景の部族もあったので、一つの集団の強大化とそれに伴う移動によって、玉突き的に周辺の諸民族の移動・戦闘・交流が盛んになったのであろう（江上 1948a, 1951）。そしてそうした相互の文化刺激の結果、鉄製の武器わけても剣とそれによって勝利を得る類似の英雄の物語や儀礼が各地で語られたり行われたりしたのではないだろうか。

文字資料も考古学資料も不十分なため、ユーラシアの諸民族の歴史には不確実な部分が多い。今回の論考も点々として場所と時代を類似によって結びつけて歴史的動きや関連を復元しようとする試みでしかなく、確実性には乏しい。今後、神話学的にこうした弱点を克服していくには、剣とは異なる伝承の場合についても同じような広がりや関連性の検討を行い、そこで得られた復元図を今回の結果と照らし合わせてみるのが望ましいだろう。

一例として本稿の前に、聖獣や聖鳥による養育やそうした聖獣の導きによる建国の神話の分布については考察を行ってきている（松村）。日本神話における神武東征でのヤタガラスや金鵄の導きがユーラシアの東端とすれば、西端としてはローマ建国者のロムルス・レムス双子兄弟を養う牝狼とキツツキがあり、その中間にも匈奴、モンゴル、ハンガリーなどに類話が見られるのである。こうした聖なる動物による始祖神話と今回の鉄剣神の伝承や儀礼とがどのような重なり合いを示すのかについて、今後さらに検討を進めたい。

— 注

- (1) 本稿では「霊剣」「神剣」「宝剣」「聖剣」「剣（の）神」などの用語が使われている。基本的には同じ観念を指す。さまざまな邦語文献を参照しているので、それぞれの著者の使う用語が異なるためである。それらを統一することも考えたが、ではどの語に統一すればよいのかという問題になり、あ

えて統一するほどの必然性はないと思ったので、多様な用語のままとなった。この点について是非大方からの御示唆を仰ぎたい。

—— 参考文献

- 上田正昭 1988：「石上の祭祀と神宝」、和田萃編『大神と石上』筑摩書房、151－174
- 宇野公一郎 1990：「ベトナムの還剣湖の形成」、阿部年晴他編『民俗文化の世界（下）社会の統合と動態』小学館、360－379
- 江上波夫 1948a：「スキト＝シベリア金属文化東伝の二著例」、『ユウラシア古代北方文化』全国書房（「径路刀と師比」として『江上波夫文化論集 3 匈奴の文化と社会』山川出版、1999、223－251 所収）
- 江上波夫 1948b：「匈奴・フン同族論」、『ユウラシア古代北方文化』全国書房（『江上波夫文化論集 3 匈奴の文化と社会』山川出版、1999、369－429 所収）
- 江上波夫 1951：「馬弩関と匈奴の鉄器文化」、『ユウラシア古代北方文化』山川出版（『江上波夫文化論集 3 匈奴の文化と社会』山川出版、1999、133－141 所収）
- エッシャー、カタリン＋ヤロスラフ・レヴェディンスキー（新保良明訳）2011：『アッティラ大王とフン族』講談社メチエ
- 大林太良 1975：『日本神話の構造』弘文堂
- 大林太良＋吉田敦彦 1981：『剣の神・剣の英雄：タケミカヅチ神話の比較研究』法政大学出版局
- 沢田勲 1996：『匈奴』東方書店
- ジェフリー・オヴ・モンマス（瀬谷幸男訳）2007『ブリタニア列王史：アーサー王ロマンス原撰の書』南雲堂フェニックス
- マイヤー、ベルンハルト（平島直一郎訳）2001：『ケルト事典』創元社
- 松前健他 1995：『渡来の神 天日槍』出石印刷
- 松村一男 2014：「神話は誰が運ぶのか」、篠田知和基編『神話のシルクロード』楽蔭書院、309－322
- 三品彰英 1971：『建国神話の諸問題』（三品彰英論文集第二卷）平凡社
- 宮崎市定 1983：『謎の七支刀：五世の東アジアと日本』中公新書 703（1991、中公文庫）
- 吉田敦彦 1974：『日本神話と印欧神話：構造論的分析の試み』弘文堂
- リトルトン、C・スコット＋リンダ・A・マルカー（辺見葉子＋吉田瑞穂訳）1998：『アーサー王伝説の起源：スキタイからキャメロットへ』青土社
- 和田萃 1988：『大系日本の歴史 2 古墳の時代』小学館
- Byock, Jesse 1984: "Saga Form, Oral History, and the Icelandic Social Context", *New Literary History* 16, 153-173.
- de Vries, Jan 1954: "Baum und Schwert in der Sage von Sigmundur", *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 85, 95-106.
- Malone, Kemp 1925: "Artorius", *Modern Philology* 22, 367-374.
- Nickel, Hemut 1973: "About the Sword of the Huns and the "Urepos" of the Steppes", *Metropolitan Museum Journal* 7, 131-142.
- Richmond, I. A. 1945: "The Sarmatae, Bremetennacvm Veteranorvm and the Regio Bremetennacensis", *Journal of Roman Studies* 35, 15-29.
- Sulimirski, T. 1970: *The Sarmatians*, Thames and Hudson.
- Thompson, E. A. 1956: "The Settlement of the Barbarians in Southern Gaul", *Journal of Roman Studies* 46, 65-75.

—— 参照原典

- 宇治谷孟訳 1988：『日本書紀（上）』講談社学術文庫
- 厨川文夫・圭子編訳 1986：マロリー・T『アーサー王の死』（中世文学集 I）、ちくま文庫
- 坂本太郎他校注 1967：日本古典文学大系 67『日本書紀上』、岩波書店
- 竹田晃訳 1964：千宝『搜神記』平凡社東洋文庫
- 武田祐吉訳注 1977：『古事記』角川文庫
- 谷口幸男訳 1973：『エッダ』新潮社
- 谷口幸男訳 1979：「ヴォルスンガサガ」、『アイスランドサガ』新潮社、所収

林英樹訳 1975 : 『三国史記 下 雑誌 列伝』 三一書房
松平千秋訳 1972 : ヘロドトス『歴史 (中)』 岩波文庫
森田悌訳 2006 : 『日本後紀 (上)』 講談社学術文庫
Ammianus Marcellinus III, Loeb Classical Library, 1938.
Dio Cassius: *Dio's Roman History IX*, Loeb Classical Library, 1927.
Dumézil, Georges 1930: *Légendes sur les Nartes*, Honoré Champion.